箱根観光情報新聞ホームページ http://hakonetravelnews.net/

タクシーのご用命は0120-148-512登山ハイヤーへ

無料
ご自由にお持ちください
箱根観光情報研究会

箱根観光情報新聞

箱根観光情報新聞
2025春号第一版
令和7年3月17日発行
企画制作
箱根観光情報研究会
協力
箱根モビリティサービス㈱
制作責任者：美馬　哲
発行部数：800部

桜はどうなるか？

毎年本紙春号の桜の紹介記事で説明していることだが、箱根は標高差があるため、本来はエリア毎に桜の開花時期が異なる。

標高一〇〇メートル前後の箱根湯本では三月下旬から四月上旬、五〇〇メートル前後の宮城野・強羅周辺は四月上旬から中旬、標高七〇〇メートルを超える芦ノ湖周辺は四月中旬から下旬に見頃を迎える。稀に一斉に開花してしまう年もあるが今年はどうだろうか。

観光に従事する立場からすると順当に標高が低いところから開花し、一人でも多くのお客様に箱根の桜を楽しんで欲しいと思う。

さて、箱根の桜で本紙が最もお薦めするのは宮城野の早川堤の桜だ。国道一三八号線沿いの土手に枝垂桜、その奥の早川沿いの堤に長さ六〇〇メートルに渡ってソメイヨシノの桜並木が続く。タイミングが合えば、ピンク色の枝垂桜と真っ白なソメイヨシノを楽しむことができる。夜にはライトアップされるので、夜桜も楽しんで欲しい。

宮城野の桜は誰が植えた？

本紙編集長は毎年、桜の時期になると早川堤にカメラを抱えて出かけ、その年の桜の風景を撮影するのだが、その度に「この桜は誰が植えたのだろう？」と疑問に感じていた。

他のエリアの桜は観光施設や宿の敷地の中なので、その施設や宿の関係者が植えたと想像されるが、宮城野の桜は個人の土地ではない。また、その規模から考えても相当な時間と資金が必要だったはずだ。

いったい誰が。そこで、今年初め、検索ページで「箱根宮城野の桜は誰が植えたのか」と検索したところ、神奈川県全域で無料配布されている地域情報紙「タウンニュース」の過去の紙面（二〇二一年三月一一日号）に「箱根町宮城野・早川川岸　知られざる桜並木の仕掛け人」と題した記事があるのを発見。日本評論社の代表だった鈴木　利貞（すずきりてい）氏と言う人物が昭和一二年頃に宮城野の業者に桜の植栽を依頼したことが紹介されていた。

鈴木　利貞氏は箱根に別荘を所有し、趣味の釣りで早川を訪れているうちに河川に桜を植えることを思いついたらしい。

その後、桜はすくすくと育ち、箱根の桜を代表する存在に成長。昭和三〇年以降は箱根町が世話をしているそうだ。

ポーラ美術館へのアクセス

箱根で西洋絵画を鑑賞するならポーラ美術館がお薦めだ。同美術館はポーラ創業家・二代目鈴木常司氏が収集したフランス印象派の作品を中心に収蔵していることで知られている。

場所はヒメシャラ街道の森の中にある。美術館の周囲には全長一キロメートルの遊歩道が整備されており、時間があれば是非入館前に散策することをお薦めする。

遊歩道入口はエントランスの右側。原生林の自然に触れた後で入館すれば、ゆったりした気分で作品を堪能できるだろう。

美術館への入館はヒメシャラ街道から緩いスロープを下り、エントランスを通ってエスカレーターを下ると一階のチケットカウンター。

ここでチケットを購入して入館するのだが、昨年からチケットはカウンター横に備え付けられている券売機で購入できるようになった。実はポーラ美術館は二〇二三年七月にハイアット リージェンシー箱根　リゾート＆スパで総支配人を務められていた野口弘子氏が館長に就任。

同氏はホテル業界で培ったホスピタリティの観点から新たな取り組みをスタッフと共に始めている。券売機の導入はその一つで、チケット販売のプロセスを機械に委ねることで、スタッフがお客様に接する機会を増やすことを目指しているそうだ。確かに、最近は荷物をお持ちの来場者の方にはスタッフがロッカーを案内したり、館内や作品の説明をする光景がよく見られるようになったと感じる。

強羅駅からの無料バスの運

行やEV充電器の導入などアクセス環境の整備も進んでいる。

チケットを購入したらエスカレーターで地下に降りる。地下一階には展示室一、地下二階には展示室二～五がレイアウトされており、企画展の開催や収蔵作品の展示が行われている。

企画展は年二回程度展示替えが行われる。企画展鑑賞が目的で来館される方も多いようだ。今年五月中旬までは「カラーズ―色の秘密にせまる　印象派から現在アートへ」、「ポーラ美術館コレクション選」、「新収蔵　ピカソ　ヴォラール連作一〇〇」が開催されている。

作品鑑賞後に御食事やお飲み物を楽しみたい方には一階のレストラン　アレイ、地下一階のカフェ　チューンがお薦めだ。作品の鑑賞後、大きな窓から森の風景を眺めながら御食事やデザート、珈琲などをいただくことができる。本紙編集長は、カフェ　チューンでハムとベーコンのホットサンドがお薦めだと語っている。

また、ミュージアムショップではポーラ美術館ならではのグッズの販売や寄木細工の体験コーナーもあるので、是非覗いて欲しい。

クロード・モネ
《睡蓮の池》　1899年　ポーラ美術館

名所巡り　仙石原茶屋

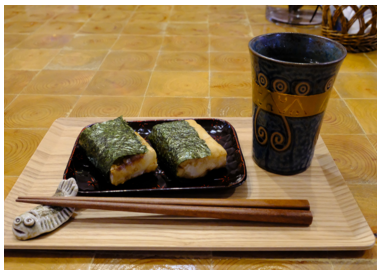
一〇年ほど前まで、仙石原のすすき草原に「金時食堂」と呼ばれる地域の人に愛された食堂があった。

バスにお乗りになる方がバス停で待つ間に食事をしたり、雑談をしたり、買い物をして過ごしたらしい。

店内には新聞や駄菓子、たばこも揃っていて、文字通り地域の憩いの場だった。その古民家風の建物をリニューアルして、二〇二三年七月にカフェがオープン。

カフェの代表　佐藤有里子氏は愛川町で育ち、ブライダルプランナー、ヨガインストラクター、議員秘書、中学校教師を経て、縁あってこの空き店舗のことを知り、みんなが集える場所を作りたいと考えたそうだ。

みんなが集える場所がコンセプトなので、奥の広い店内には大きなラウンドテーブルが一つ。テーブルは檜と杉の木を使った特注品。店内の柱や椅子、カウンターなども桐や松、欅などの木材が使われている。



木には健康や幸福など様々な意味があり、お客様を優しくお迎えするのに相応しい場所を演出している。

今年初め、本紙編集長が店内に掛けられていた箱根を題材にした絵を眺めていたところ、その作品の作者の方が丁度店内にお越しになっていて、代表の佐藤氏から紹介されて名刺交換、箱根の話題で盛り上がったらしい。みんなが集える場所ならではのエピソードだ。

メニューは珈琲、紅茶、ジュースの他、ソフトクリーム、一番人気のほろ苦レトロプリン、おしるこ、磯辺餅など豊富な品揃え。ほろ苦レトロプリンは代表のご実家の近所で採れた赤玉子の卵黄二つを使った贅沢プリン。

健康志向の方向けのオーガニック商品や焼菓子も取り扱っている。

なお、ご実家で採れたお米「はるみ米」も扱っている。カフェは沢山あるが、磯辺餅がいただけて、お米も手に入るお店はここだけではないか。

また、本紙編集長が見とれていた箱根を題材にした絵の作品だが、数年前にアメリカから箱根に拠点を移して作家の活動を続けられている楠大八郎氏の作品。仙石原茶屋でも購入できる。

ちなみに本紙編集長は「箱根の観光に携わる者として是非自宅に飾りたい。」と考え一点購入したそうだ。

お願い

本紙ではお客様にできる限り正確に情報をお伝えするよう努力しておりますが、紙面の都合上、お店の場所や営業日、営業時間などの詳細をお伝え出来ない場合がございます。お手数をおかけしますが、訪問される前にお店や施設のホームページなどで営業日、営業時間などをご確認くださいますようお願いいたします。

なお、左記QRコードで過去の記事や画像、編集長の思い出などを紹介した本紙ホームページにアクセスできるのでお試しください。

箱根観光情報新聞QRコード

箱根に観光に来たけれど
「どこを見たらいいかわからない。」
「効率的に観光したいけれど・・・。」
とお悩みのあなた
箱根観光は登山ハイヤーがお薦めです。

今すぐ
0120-148-512(携帯OK)へ